東海古代研究会　令和七年

東海の古代

第303号　2025年11月

会長　：　宮澤健二
編集　：　石田泉城　　投稿先アドレス：toukaikodai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

生口十人で洛陽に朝貢の謎

名古屋市　田沢正晴

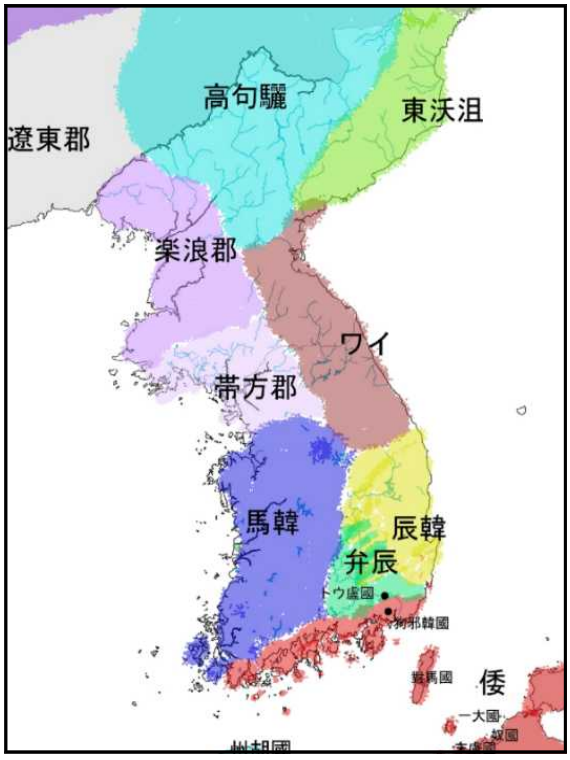
１．はじめに

『魏志』倭人伝の後段に、「**景初２年（西暦238年）６月、倭の女王は大夫の難升米等を（帯方）郡に詣らせ、天子に朝献を求める。太守の劉夏は吏将をつけて京都（魏の都）に送った。**」と記されている。

これを読むと、卑弥呼は最初から魏の都、洛陽を目指していたように見えるし、通説では、卑弥呼が使者を派遣した目的は、大国である魏の後ろ盾を得ることによって、邪馬台国が倭国の中で優位な地位を占めることだったと言われている。本当にそうだろうか。

同年12月には、魏帝から倭の女王に報いる詔書が出され、そこには倭王卑弥呼が、男の生口四人、女の生口六人、班布二匹二丈を献上したことが明記されている。このような、ほとんど手ぶらに近い状態で、卑弥呼もその使い難升米も帯方郡に到着した時点では洛陽に赴き、朝貢・冊封しようとは毛頭考えていなかったとしか思えない。ところが、「卑弥呼は使者を洛陽に派遣し朝貢した」との論点に異を唱える論説はほとんど見かけない。

もう一つ不思議なのは、帯方郡の太守に着任したばかりの劉夏が、あまりに身軽過ぎる難升米一行を、独断で洛陽に送り出すことはあり得るのだろうかという点である。難升米が帯方郡に到着した６月には、遼東で司馬懿と公孫淵が戦っている最中なのだ。戦時に勝手な判断は許されないのではないか。



一つ目の謎、「卑弥呼は使者を洛陽に派遣したか」については、これは当初は「帯方郡への挨拶程度の訪問だった」との新たな説を提唱したい。

『魏志』韓伝には、西暦204年に公孫氏が楽浪郡の南に帯方郡を設置し、その年から韓と倭は郡に属したとある。

辰韓の鉄の権益を得るため、204年から30数年間にわたって、倭の国々も帯方郡へ定期的に詣でていたのだろう。238年６月の難升米の帯方郡詣でもその一環だったに違いない。

２．３世紀の大陸と半島の状況

ここからは、帯方郡に到着した難升米一行に何が起きたのか、難升米一行の行き先が、当初の帯方郡から一転して洛陽になった理由を考察する。

この理由を解くためには、後漢滅亡後の魏・蜀・呉の三国の政治状況、楽浪郡・帯方郡、倭韓それぞれの状況とその相互関係を押さえておく必要がある。

西暦220年に後漢の献帝は、魏の礎を築いた曹操の子である曹丕に帝位を禅譲して滅亡する。同年、曹丕（文帝）は魏を建て、翌年には劉備が蜀を、222年には孫権が呉を建国して魏・蜀・呉の三国時代となる。魏とすれば、南方の呉、蜀だけでなく朝鮮半島北部で半独立政権を立てた公孫氏の専横も気になるところだ。189年の後漢の時代に公孫度は遼東太守に任ぜられ、楽浪郡なども支配する。204年には、公孫度の嫡子である公孫康が楽浪郡の南に帯方郡を設置し、先述のとおり『魏志』韓伝によるとこの年以後、韓や倭は帯方郡に帰属したとされる。237年には公孫淵が「燕王」を自称して、魏と対立するようになる。

加えて、呉の孫権は公孫淵からの要請で援軍を差し向けたり、230年には呉の東方の海域である夷州（いしゅう）・亶州（だんしゅう）に兵を送っている。夷州は台湾、亶州は倭（日本のどこかは不明）との説もある。魏とすれば、まさに四面楚歌の状況だった。

このような情勢のなか、魏の曹叡（明帝）の景初二(238)年６月、卑弥呼の使者、難升米が帯方郡を訪れるのである。一説によると、難升米が戦闘中の帯方郡を訪れたのは景初二年ではなく三年が正しいとする。『日本書紀』、『梁書』、『北史』には景初三年とあること、公孫淵が滅ぼされたのは238年8月であるので、難升米が戦場である帯方郡を訪れるのは不可能であるとの新井白石以来の説が根拠となっているようだ。

しかし、238年前半の帯方太守は劉昕、その後劉夏（238年６月～12月・注1）で、何れも魏の役人である。つまり、難升米が帯方郡を訪れたときには、公孫氏の支配ではなかったことになる。魏の武将、司馬懿と公孫淵が238年８月に戦った舞台は遼東地域であって、帯方郡は戦場ではない。従って、『魏志』倭人伝の「景初二年」は間違っていない。

３．司馬懿の策略

公孫淵を倒した司馬懿とは、『三国志演義』で蜀の初代皇帝劉備、それを助けた諸葛亮（孔明）、呉の初代皇帝孫権、魏の実質的建国者曹操らに並び称される人物である。有名な故事、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」の仲達は司馬懿の字である。

266年には司馬懿の孫、司馬炎が魏より禅譲を受けて西晋の皇帝となる。このような経緯から『三国志』の著者である陳寿は、司馬炎の祖父である司馬懿の功績を顕彰する必要があったのだろう。その功績とは、東方の大国である倭の女王卑弥呼に朝貢させたことに他ならない。

景初二年６月に難升米一行が帯方郡に到着したちょうどその時、司馬懿は遼東郡の遼隧（りょうずい）に到着し、８月には公孫淵を征伐する。難升米一行が洛陽に到着し詔書を受け取るのは12

月なので、司馬懿の命を待って帯方郡を出発したとすれば辻褄が合う。
つまり、卑弥呼の使者、難升米一行が洛陽に向かった理由は、卑弥呼や難升米の意志ではなく、司馬懿の策略だったのだ。

４．見方を変える

余談ではあるが、「神武以来（このかた）の天才」の異名を持つ将棋の加藤一二三氏は、1978年のタイトル戦で対局者が席を外した時、ふと思いつき対局者が座っていた場所から盤面を見て、絶妙手を発見して勝利した。これ以来加藤氏は、時には対局相手の側から盤面を見るようになった。最高裁判事も勤めた山浦善樹氏は、一橋大学学長（当時）の山内進氏との対談(2013年)の中で、加藤一二三氏のこの逸話に言及した上で、司法においても「相手の立場から自分の側を観察し、予断を捨てて相手側に立ってみることが必要」と述べている。
歴史研究の場面も同様である。倭の立場で解釈しがちであるが、魏晋の側からの見方に変えてみると新たな真実が発見できる。卑弥呼とその使い難升米は自らの意志で洛陽に赴いたと言うのが、これまでの視点であった。これを帯方郡太守劉夏と魏の武将司馬懿の立場にたって見てみよう。
劉夏は前任者の劉昕から帯方太守のバトンを渡されたばかり。238年６月に着任し、その月に難升米が突然現れた。『魏志』倭人伝は「**太守劉夏は吏将をつけて京都（洛陽）に送った**」と簡潔に書いているが、着任早々の劉夏は当然、難升米らを魏の都に送るべきか、上長である司馬懿の判断を仰いだはずだ。こうして司馬懿は、倭の一行が帯方郡にいると言う情報を入手した。この一見して些細な情報を、司馬懿は千載一遇のチャンスと捉えたのである。さすがと言うほかない。

５．司馬懿の目標

この情報から司馬懿は二つの目標を定めた。一つ目は倭を味方につけて、呉に対して優位に立つこと。もう一つは、倭は西の大国、大月氏国に匹敵するほどの大国であることを魏帝に印象付けること。この二つだ。
司馬懿のライバル曹爽の父親である曹真は、229年に西域にあった大月氏国（クシャーナ朝）から魏への朝貢を実現させた。蜀を背後から牽制するためと言われている。その年、魏の曹叡（明帝）は波調王（ヴァースデーヴァ）を親魏大月氏王に封じ金印を贈った。その９年後の238年に、図らずも司馬懿には曹真を上回る功績をあげるチャンスが巡ってきたのだ。大月氏国は『後漢書』西域伝によると洛陽から16,370里と遠方で、戸数10万戸の大国とある。大月氏国に対抗して倭国を大国に仕立て上げるにはどうすべきか。司馬懿は明帝へのアピールに大いに腐心したに違いない。帯方郡から邪馬台国迄は12,000里、これに洛陽から楽浪までの5,000里を加えると17,000里となって、大月氏国までの距離を上回る。逆に言えば、功を焦る司馬懿には、帯方郡から邪馬台国までに12,000里の距離が必要だったのだ。
すなわち、呉に対する優位の確立と自らの功績のアピールという二つの目標を達成するために、司馬懿は倭国が大月氏国よりも遠い大国であると印象付ける必要があった。

６．生口十人に対する過大な返礼品

司馬懿は倭国を遠い国、大きい国だけでなく、立派な国に仕立て上げたかったのだろう。倭からの朝貢が生口十人と班布二匹二丈だけだったのに対し、魏帝が難升米一行に信じられないくらいの厚遇をしたことが、『魏志』倭人伝に詳しく記されている。
「**汝の住んでいる所は遠いという表現を越えている。すなわち使者を派遣し、貢ぎ献じるのは汝の忠孝の表れである。私は汝を甚だいとおしく思う。**」

この文言に続いて、魏帝は卑弥呼を親魏倭王とすること、金印紫綬を与えること、銅鏡百枚をはじめ絢爛豪華な下賜品を贈ることが列記される。これらの過大な返礼品に、やや不自然さが感じられるが、これも司馬懿の策略の一つと考えれば納得できる。

こうして司馬懿は、① 倭国は郡から12,000里と遠方にあること　② 戸数は投馬国と邪馬台国で12万戸と大月氏国の十万戸を上回ること　③ 金印を与えるに相応しい国（金印はこの２国のみ）であること、の３点を魏帝に見事に示した。司馬懿の作戦成功である。

７．まとめ

（１）卑弥呼は朝貢・冊封を目的に、難升米を洛陽に派遣したとの通説は間違いで、当初は帯方郡への挨拶程度か定期訪問のような軽い派遣だった。
（２）その根拠は、生口十人と布だけで洛陽に赴くとはとても思えないからである。
（３）卑弥呼の使い難升米等が洛陽に行くことになったのは司馬懿の策略である。
（４）司馬懿の目的は、呉に対する牽制と自らの功名の二点である。

このことから、卑弥呼は司馬懿の作戦に乗せられたように見えるが、結果として卑弥呼は親魏倭王の称号と、膨大な下賜品並びに魏の後ろ盾を得られたのは事実なので、倭と魏は互いにウインウインの結果を得られたと考えられる。

邪馬台国への１万２千里再考

東海市　大島秀雄

１．はじめに

筆者は「東海の古代」第278号で、帯方郡から邪馬台国までの距離一万二千里を実数とみなして現在の地図から里数のみで場所を特定しようとするのはナンセンスであるとしたのですが、今回は話を一歩前に進めて、『三國志研究』第六号（三國志学会、2011年）に所収の「『三国志』東夷伝倭人の条に現れた世界観と国際関係」渡邉義浩著に邪馬台国関連の有益な情報がありましたので、これを参考にしつつ帯方郡から邪馬台国までの１万２千里の持つ意味を再考するとともに、邪馬台国が「会稽・東冶の東に在るべし」という記述との整合性などに重点を置いて検討します。

２．渡邉義浩氏の論考概要

今回の検討に関連する個所をピックアップすれば、概略は次のとおりです。

（１）「親魏〇〇王」という称号の形は「親魏大月氏王」と「親魏倭王」のみに限定される。
（２）邪馬台国と同等の称号を持つ大月氏国は、『後漢書』列伝によれば洛陽から一万六千三百七十里の彼方にある。朝貢する夷狄が遠方であればあるほど、それを招いた執政者の徳は高い。陳寿が邪馬台国を招いた執政者の徳を大月氏国のそれと同等以上にするためには、邪馬台国は洛陽から一万七千里の彼方にある必要が生まれる。
（３）洛陽から帯方郡までが五千里であるから、邪馬台国は帯方郡から一万二千余里の彼方なのである。これが、帯方郡から邪馬台国までの距離を一万二千余里としている理由である。
（４）倭国が孫呉の背後にあたる中国の東南にあるべきだと陳寿も考えていることは、「当に会稽・東冶の東に在るべし」という書き方にも明らかである。
（５）このように、「倭人の条」の距離と方位は、陳寿の理念に基づいて定められている。距離は大月氏国より少し遠く、方位は呉の背後となるように設定されているのである。それは、『三国志』の中で、ともに「親魏〇王」となる「親魏大月氏王」と「親魏倭

王」とをそれぞれ蜀漢と孫呉の背後の大国として対照的に表現するためであった。倭国は、大月氏国と並立すべき東の大国でなければならないのである。

（６）引き算をすると不弥国から邪馬台国までが千三百里になってしまうが、基づいた史料が異なるのではなく、当時存在した記録に基づきながらも、距離の辻褄を合わせるために、最後の二国の距離をぼかして記述した、と考える方が真実に近い。

（７）海南島は『漢書』地理志の粤地に属するが、その習俗の一部は「倭人の条」と共通しているので、倭人の習俗を南方系につくりあげた蓋然性は高い。

（８）邪馬台国論争が繰り広げられた方角・距離の比定は、陳寿の理念に覆われている。「倭人の条」に記される邪馬台国は、九州でも畿内でもなく、会稽郡東冶（福建省福州市）の東方海上に位置する。

３．『後漢書』による考察

陳寿の理念に左右されながらも比較的正確を期していると思われる『後漢書』については、講談社学術文庫の『倭国伝』（以下、文庫本と称す）に所収の『後漢書』倭の前段部分に次のように書かれています。

「**倭は、韓の東南の大海の中に在り。（倭人は）山島に依りて居を為り、凡そ百余国あり。武帝の朝鮮を滅ぼしてより、使駅の漢に通ずる者、三十許の国ありて、国ごとに皆王と称し、世世統を伝う。その大倭王は邪馬台国に居す。楽浪郡の徼は、其の国を去ること（一）万二千里にして、其の西北界の、拘邪韓国を去ること七千余里余りなり。其の地、大較（おおむね）会稽・東冶の東にあり、朱崖・儋耳と相近し。**」

それでは、『後漢書』志に洛陽から南海郡治（広東省広州市）までの距離が南7,100里と記述されていますので、『魏志』倭人伝の里程情報から邪馬台国が洛陽の南何里の距離にあるのかを算出しますと、結果は5,578里です。

『後漢書』志には洛陽から東冶県までの距離が記載されていませんので、現代の地図で上記7,100里を基準としてその距離を求めると約5,000里となり、両者の緯度はほぼ同じになりますので、『後漢書』のいう「会稽・東冶の東にあり」と一致し、邪馬台国は東冶県の東方の海上にあることになります。

また、『後漢書』には『魏志』にない「朱崖・儋耳と相近し。」の記述が目を引きますが、南海郡治の南に朱崖・儋耳（海南島）があり、その南に日南郡治がありますので、『後漢書』志の洛陽から日南郡治までの距離は南13,400里ですから、朱崖・儋耳は洛陽の南7,100里から13,400里の間にあることになります。この距離では呉の首都の背後から大きく外れてしまいますので、『魏志』ではこの記述は除外されたのでしょう。『魏志』倭人伝に会稽・東治との表記がありますが、文庫本でも東冶に修正されており、会稽郡に東治県は存在しません。また、『後漢書』の「**朱崖・儋耳と相近し。**」の記述から考えても、通説通り『魏志』のいう東治県は後漢時代の東冶県の誤写であり、現在の福州市とする渡邉氏の見解は妥当です。

なお、『魏志』や『後漢書』が参考にしたと思われる後漢の王充の著書『論衡』には、「**周の時代、天下太平。越裳は白い雉を献じ、倭人は鬯草（ちょうそう）を貢いだ。**」とあり、また、「**白雉は越に於て貢がれ、暢草は宛に於て献じられる。**」との記述があります。この記述は紀元前1,000年頃の周の成王の時代の話なので日本列島の倭人やベトナムの越裳が周王朝に認識されていたはずもありませんが、後に現在のベトナム北部にあった日南郡の場所に越裳国があり、宛とは交阯郡の東隣にあった鬱林郡（広西チワン族自治区中央部）のことですので、このことから、倭人は朱崖・儋耳を含む越（今のベトナム北部）方面の人々であるとの認識で『後漢書』が書かれたのかもしれませんが、『魏志』がいう会稽・東治の東の12,000里が正しいものとすれば、特に末盧国までの里数を過大に見積もった結果であり、

それを見直せば海南島付近であろうと『後漢書』の著者が考えていた可能性もあります。

４．まとめ

（１）現在の日本の地図を基にして帯方郡から12,000里離れた邪馬台国の場所を求めようと、短里や行程の放射状の読みを採用してきた訳ですが、そもそも12,000里の距離がどうして出てきたのかの議論が抜け落ちていました。それを明確にしたのが今回の渡邉義浩氏の論考だったのですが、もう１つ抜け落ちていた「会稽・東冶の東」との整合性もこの論考で明らかになり、計算上も確認できたことは有意義であったと思います。

（２）一部の行程で里数が把握されていないのに総距離12,000里が出てくるのは、渡邉氏が指摘したとおり「親魏大月氏王」と「親魏倭王」とをそれぞれ蜀漢と孫呉の背後の大国として対照的に表現するために設定したものであり、現実の日本列島の方位とも合わないのは当然です。

（３）『後漢書』では『論衡』の記述を誤解したか、または『魏志』の特に末盧国までの里数の記述に疑問を持った結果、邪馬台国は「朱崖・儋耳と相近し。」と記述した可能性があります。

　また、『後漢書』では倭奴国は「倭国の極南界なり」とあることから、朱崖・儋耳よりさらに南に位置していると認識していた可能性があります。

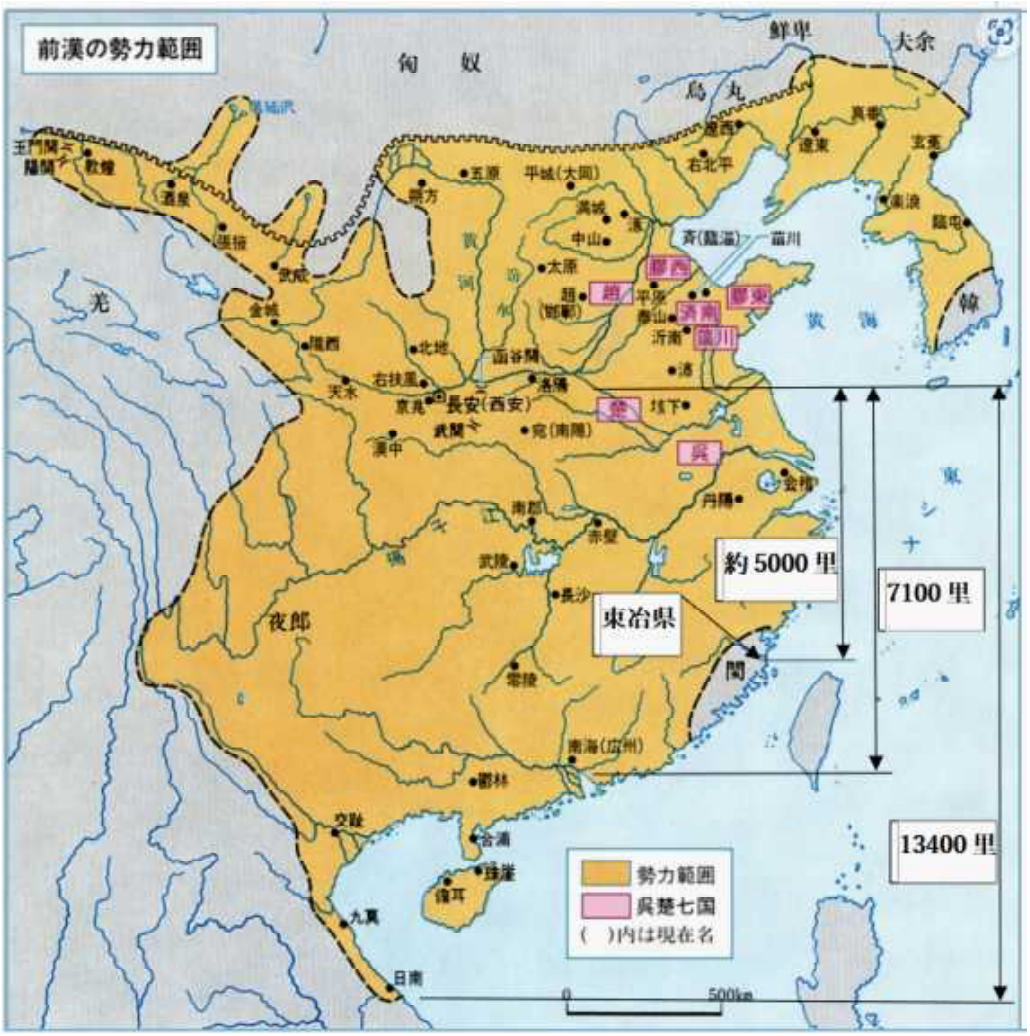
（４）『魏志』倭人伝の帯方郡から邪馬台国までの距離12,000里は、邪馬台国の場所が会稽郡東冶県の東方の海上に対応したものであったが､不弥国から投馬国まで船で20日、投馬国から邪馬台国まで船で10日、陸行１月としているのは、実際に帯方郡使が何往復かしているわけなので、往来実績の概略日数を示したものとするのが妥当ではないでしょうか。

　そうだとすれば、玄界灘周辺にあった不弥国（福津市付近か）から邪馬台国までは相当な距離があったはずであり、九州からはみ出す可能性は十分にありますし、たとえ九州内におさまったとした場合には、伊都国や奴国を束ねるような女王国が辺境の地に存在していたことになり、考古学上からも信じ難い結果となります。

（５）従って、『魏志』のみに依拠した邪馬台国論争は無意味であり、文庫本の『隋書』倭国伝に、「邪靡（摩）堆に都す。則ち『魏志』に謂う所の邪馬台なる者也。」との記述がありますので、これは7世紀の倭国の都の邪摩堆＝大和に邪馬台国があったとしているのですから、これが中国側の史料で唯一の邪馬台国の場所を記述したものではないでしょうか。『日本書紀』の国生み神話の注に、「日本、此云耶麻騰」と出てきますので、『隋書』倭国伝の邪摩堆＝耶麻騰なのでしょう。

洛陽から邪馬台国までの南北間の距離算出表

地名間	方角と距離	南北間の距離	備考
洛陽→楽浪郡治	東北5,000里	−3,536里	洛陽から北なのでマイナスの里数
楽浪郡治→帯方郡治	東南550里	389里	推定値
帯方郡治→韓半島西南端	南4,000里	4,000里	韓半島は方4000里
韓半島西南端→拘耶韓国	東3,000里	0里	算術上の数値
拘耶韓国→末盧国	南3,000里	3,000里	
末盧国→伊都国	東南500里	354里	
伊都国→奴国	東南100里	71里	
奴国→不弥国	東100里	0里	
不弥国→邪馬台国	南1,300里	1,300里	算術上の数値
（洛陽→邪馬台国）	―	**5,578里**	



検索サービスのコトバンクの「漢」の項の地図に加筆

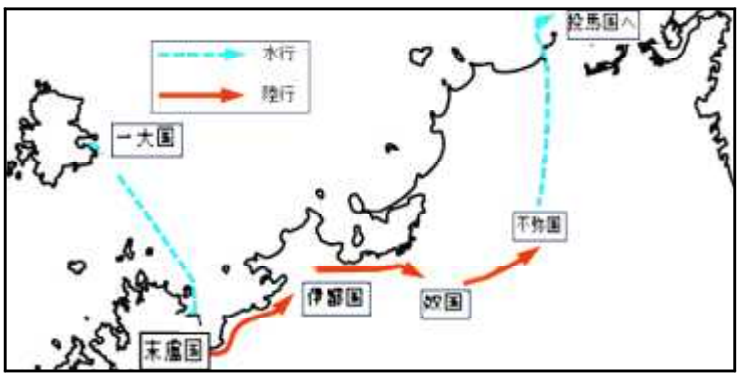
連続説の是非

吉川市　堀口 啓一

１．連続説の是非

『魏志』倭人伝の行路記述を連続説(あるいは連続式読法もしくは連続記法)で読解する場合の是非を考えてみたい。連続説を採った場合の九州内での行路は次の通りとなる[*1]。

図1 連続説における九州での行路地図1



[*1] 無料で利用出来る白地図専門店(https://freemap.jp/)が公開している白地図(https://freemap.jp/item/region/kyusyu.html)を基に編集している。

それぞれの比定地としては、現時点での定説や有力説で採用される地域を描いている。末盧国は佐賀県唐津市[*1]、伊都国は福岡県糸島市(あるいは糸島市の平原遺跡・三雲南小路遺跡・井原鑓溝遺跡(この遺跡は場所を特定出来ていないが)の領域)[*2]、奴国は須玖遺跡群を中心とした福岡県福岡市・春日市としている[*3]。

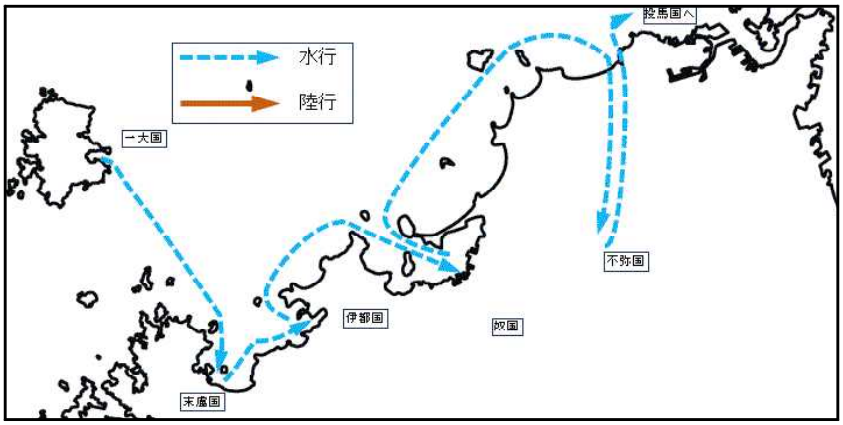
不弥国の領域はどこであるか、判断が難しい。と言うのも候補が濫立しているからだ。以前は福岡県糟屋郡宇美町が定説の如き地位を占めていたようであるが[*4]、福岡県旧穂波郡(現福岡県飯塚市穂波地区に地名が残る)もしくは福岡県飯塚市立岩遺跡群を唱える者もおり[*5]、今は飯塚市の方に比重が移っているようだ。穂波(ほなみ)は不弥国と表音が近いと言うのも、根拠となっているらしい。もっとも、本論攷では不弥国の所在地を論じるつもりは無いため特に深入りする事は無く、一応立岩遺跡群を採用しておく。

この地図を見て、次のような疑問を抱くのは自然な事かと思う。

疑問1:一大国から末盧国へ船で移動して不弥国から投馬国へ船で移動しているのに、末盧国から不弥国までは何故陸路を移動しているのか?

率直に言えば、末盧国から不弥国まで水行すれば良いように映る。地図で示すと次のようになる。

図2 連続説における九州での行路地図2



あるいは、伊都国から不弥国までは陸行では無く水行なのかも知れない。行路記述を見るに、

- 東南陸行五百里 到伊都國、
- 東南至奴國百里
- 東行至不彌國百里(『三国志』『魏志』倭人伝)

末盧国から伊都国までは確実に陸行であるものの、その後の行路は移動手段が書かれていないからだ。ただし、その場合は、

疑問2:末盧国から伊都国の移動だけは何故陸路を移動しているのか?と言う事になり、不自然感は残ってしまう。この陸行と水行については、韓地の移動手法にも関わって来る。韓地水行を唱える論者は多い[*6]が、それは次のような理由であるらしい。

韓の国を陸路で通過したとみる意見があるが、陸路を経て狗邪韓国に到着した場合、そ

---

*1 例えば「邪馬台国はどこにあったのか――畿内大和説」『ここまでわかった! 邪馬台国』(西本昌弘、新人物往来社、2011年)等。
*2 例えば「邪馬台国時代の九州」『邪馬台国の時代』(下條信行、木耳社、1990年)。
*3 例えば『九州考古学散歩』(小田富士雄編、学生社、2000年)。
*4 例えば『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝(1)』(石原道博、岩波文庫、1985年)。
*5 例えば『悲劇の金印』(原田大六、学生社、1992年)。
*6 例えば「『魏志』倭人伝全文を読む」『ここまでわかった! 邪馬台国』(田中俊明、新人物往来社、2011年)。

こから先の船の調達をどうするのであろうか。魏からは、倭国の朝貢に対する回賜品がもたらされたのであり、例えば「銅鏡百枚」がそれである。かなりの質量になった筈の**回賜品を運ぶのに、陸路を採るのは容易ではない。**[(*1)]

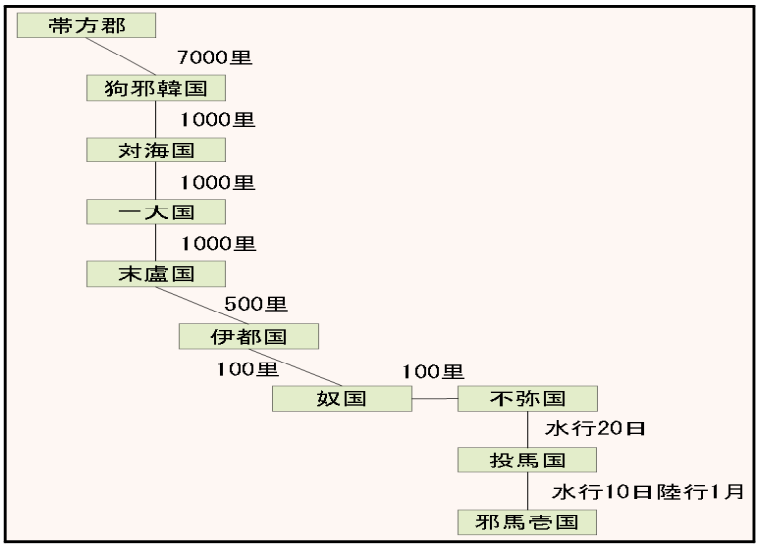
これはそのまま末盧国以降を陸行する際にも当て嵌まる事になる。魏の賜与物を船から降ろして陸路で輸送する事に反対しているのであれば、末盧国以降の陸行にも疑問を持たなければならない筈だ。末盧国で船から荷を降ろして陸路を進み、不弥国でまた船に荷を載せている事になるからだ。これはダブルスタンダードに近いと言って良く、末盧国以降の陸行を認めるのであれば韓地陸行への批判を撤回すべきであろう。また、船の調達についても同様の疑問となって返ってしまう。つまり、

疑問3:図1で不弥国から投馬国へ移動する際の船は誰がどこから調達したのか？

と言う事になる。田中氏は韓地水行・ヤマト説のようであるが、他説を批判する要素を自論には適用しない姿勢は何とも清々しく、そして大変に都合の良い学者である。

また、連続説の行路では別の問題も見受けられる事になる。連続説での行路略図は次の通りとなる。

図3 連続説における行路略図1



この行路については多くの論者から疑問が寄せられている。つまり、

疑問4:帯方郡から不弥国まで里数値で記されているのに、何故不弥国以降は日数値で書かれているのか？ と言う事になる。行路の途中から里数値では無く日数値に表記が移る事に対して、梯儁や張政は九州まで来倭したが女王国へは到達せずに途中で引き返したため、途中からは里数値が分からず倭人からの伝聞を記載したと言う見解[(*2)]もある。一見すると非常に説得力があるかのように思われてしまうかも知れないが、この見解では次の記述と矛盾してしまう。

自郡至女王國萬二千餘里(『三国志』『魏志』倭人伝)

ここには明確に帯方郡から女王国までの距離が記されているからだ。つまり何らかの方法で魏使(魏朝からの使者つまり梯儁や張政)は不弥国以降の行路の距離を把握出来ていた事になる。そして次の他史書の記述を読む限りでは、倭人は度量衡を把握出来ていなかったようにも映る。

---

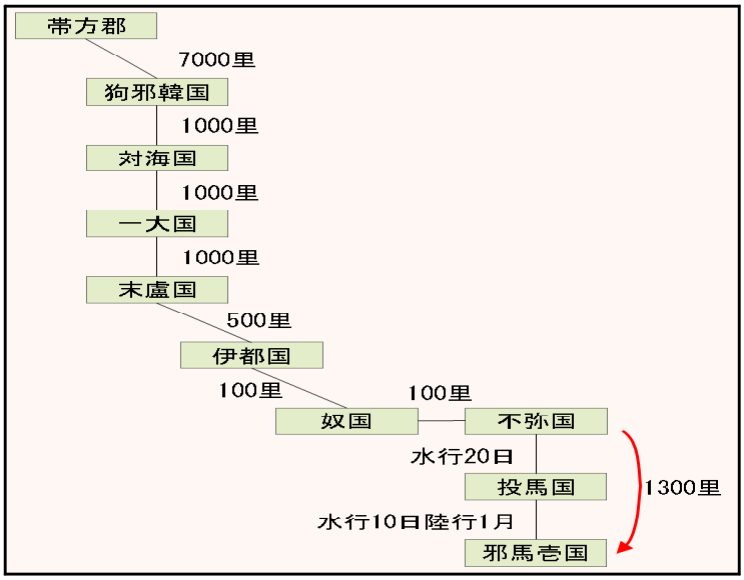
*1 田中前掲論稿P. 54。

*2 例えば『女王卑弥呼の「都する所」 史料批判で解けた倭人伝の謎』(上野武、日本放送出版協会、2004年)や『魏志倭人伝二〇〇〇字に謎はない』(相見英咲、講談社、2002年)。

夷人不知里數 但計以日(『隋書』俀国伝)[*1]

倭人が里数を知らなければ魏使以外の誰が女王国までの里数値を知る事が出来たのであろうか？　魏使は女王国に到達しており、その過程で里数値も把握出来ていた事になる。帯方郡から不弥国までは合計で10700里なので、不弥国から女王国までの里数値は残里数の1300里となる。里数を含む行路略図は次の通りとなる。

図4 連続説における行路略図2



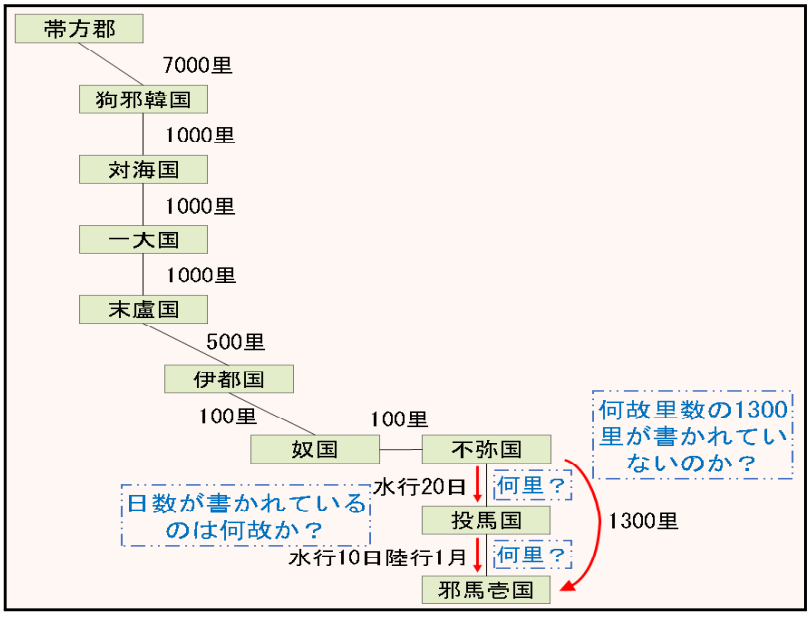
この図を見れば、次の疑問も生じてしまう。

疑問5:何故不弥国から女王国までの距離を素直に1300里と書かなかったのか？　不弥国から投馬国までの里数は何里で、投馬国から女王国までの里数は何里か？

疑問6:不弥国から女王国までの距離が分かっているのに、何故日数値を記したのか？

里数値が分かっているのであれば、不弥国から投馬国への距離と投馬国から女王国への距離を別々に書けば良いのである。このようにこの説は色々と問題があるように思われる。問題を整理すると、次の図のようになる。

図5 連続説における行路略図3



[*1] 唐朝 魏徴撰『隋書』俀国伝。

２．連続説は解決すべき要素が多い

連続説での疑問は記述した通りであるが、解決すべき要素が多いように映る。また、陳寿が強く意識していたと読み取れる『漢書』西域伝では連続記法を採用しておらず、もし『魏志』倭人伝で連続記法を採用したのであれば史書としての連続性が断たれてしまうと言う点についても、解決しなければならない。連続説では手腕が問われる事になる。
なお、本論攷では連続説に対して言及しているが、ヤマト説そのものを否定している訳では無い。私は連続説を採らずにヤマト説を唱える事は可能であると考えているが、これは後で述べる。

陳寿の忖度と范曄の誤認

名古屋市　石田 泉城

１　倭人伝の里程

『魏志』倭人伝の里程などについては、信用できないとする考えと信用できるとする考えの二つの意見があります。信用できないとする代表格は、松本清張で、その著書『古代史疑』（中央公論社、1968年）において、「里程や日数は虚妄の数字」であり「陰陽五行説から出ている机上の数字」であって、また蛮夷の多くの国々は長安から１万２千里の距離であるとして、江戸時代からの里程論を痛烈に批判しています。

ただし、陰陽五行説の好数である一、三、五、七の数字がすべてに使われているかというと、倭人伝では、総計の「萬二千餘里」や奴國の「二萬餘戸」が好数とはいえませんので、陰陽五行説だけでは計り知れません。

信用できないとする考えは、范曄の『後漢書』の記述を重視する傾向にあります。

これに対して古田武彦は、陳寿が『魏志』倭人伝の頃と同時代の人であるからその内容は信用がおけるとして、里程をそのまま事実であると捉え、対海國、一大國の「島めぐり読法」の仮説を加えて、地点から地点の各里程の総和が１万２千里になっていると主張しています。「島めぐり読法」によって数字はぴったり一致しますが、ただし、「方」の概念を距離換算することが当時理解されていたか不明でありやや恣意的な感じが否めません。

２　司馬懿や皇帝への忖度

個々の里数の概数について改めて確認すると、（帯方）郡から狗邪韓國までが７千里、狗邪韓國から末盧國までが３千里、末盧國から不弥國までが７百里の合計10,700里と記されています。これらの里程をもとに洛陽からの距離を考えると、洛陽から平壌（楽浪郡）までは『後漢書』郡国志に「東北五千里」とされ、仮に帯方郡をソウルとすれば、平壌からは550里となり、洛陽からソウル（帯方郡）までの総距離が5,550里です。したがって、洛陽から邪馬壹國の入口である不弥國までは、10,700里に5,550里を加算した、16,250里となります。しかし、これでは、親魏大月氏王の称号と金印が与えられた大月氏國（クシャーナ朝）の16,370里の距離にわずかに届きません。

司馬懿の孫、司馬炎が西晋の皇帝であり、西晋の官吏である陳寿としては、晋朝の礎を築いた司馬懿や皇帝に忖度して、倭國が如何に大国でかつ東の遠方から貢献しているかを示すことによって、司馬懿の功績や皇帝の権威を大きく見せようとしたと思われます。そこで、倭國の戸数については、西方の大月氏國の10万戸を凌ぐ15万戸として倭の国の規模を大きくみせるとともに、遠方からの貢献とすべく、既知の数値を積み上げた総計10,700里ではなく、帯方郡から邪馬壹国までを「萬二千餘里」と記すことで、洛陽から邪馬壹国までの距離は、帯方郡と楽浪郡の距離550里を無視しても12,000里に5,000里を加算した、17,000里となり、大月氏國の距離を超えるようにしたと考えられます。

３　「當在会稽東治之東」

『魏志』倭人伝には、「**計其道里　當在会稽東治之東**（その道里を計るに、まさに会稽東治の東にあるべし）とあります。

『魏志』倭人伝には「會稽東**治**の東」と記されており、会稽と言えば会稽山（現在の香炉峰）のある地であり、次の図に示したとおり、その会稽には「东治（東治）」の地名が現存しています。この「东治（東治）」が『魏志』倭人伝が指すところであり、このことを知らない歴史学者が多いようです。というよりも、この「东治」の地名が現存することを指摘するのは私が初めてではないでしょうか。

陳寿は、女王国がこの「东治」の東にあたるとしており、それは九州を指し示しています。なお、「东」は、中華人民共和国で使用されている「東」の簡体字です。

范曄の『後漢書』の各版本は、異同・誤刻が非常に多く、しかも『後漢書』倭伝は『魏志』倭人伝の要約ですから、「會稽東**冶**」は明らかに<u>**范曄の誤認**</u>と思います。

「會稽東冶の東」とすると會稽郡東冶県（現在の福建省福州市）の東という意味になり、台湾や沖縄のあたりを指すことになりますので東夷の範疇から外れてしまいます。

（＊google mapを泉城が加工した地図）

４　「所有無與儋耳朱崖同」

『魏志』倭人伝の中でよく問題にされる「**所有無與儋耳朱崖<u>同</u>**」の記事について、「儋耳朱崖（海南島）」の所在が倭と同じ位置にあると勘違いされやすいですが、これは、次の記事が示すとおり、倭の「風俗」が儋耳朱崖（海南島）と同じであるという意味です。

<u>其風俗</u>不淫　男子皆露紒　以木緜招頭　其衣横幅　但結束相連　略無縫　婦人被髪屈紒　作衣如單被　穿其中央　貫頭衣之　種禾稲紵麻蠶桑　緝績出細紵縑緜　其地無牛馬虎豹羊鵲　兵用矛盾木弓　木弓短下長上　竹箭或鐵鏃或骨鏃　<u>所有無與儋耳朱崖同</u>

（倭の風俗は）所有の有る無しが儋耳朱崖（海南島）の人々と同じである。

紀元前には、海南島に珠厓郡と儋耳郡が置かれていました。

ここに儋耳朱崖が記されているのは、儋耳朱崖も倭もそれぞれ紀元前から百越の一つとして認識され、百越の南端が儋耳朱崖であり百越の北端が倭であるので、倭は儋耳朱崖とよく比較して示され、百越の認識をもとに風俗が同じであると記されたと考えられます。

百越とは、古代中国の長江流域を起源として呉越から越常つまり長江からベトナム北部にかけて広がる海岸沿いや海域に広く居住していた諸民族の総称であり「**成王時　越常獻雉　倭人貢鬯**（**成王の時、越常は雉を献じ、倭人は暢を貢ず**）」（『論衡』恢国篇第五八）とあるように、古くから越常と倭人とは、同じ百越として並べて記されています。

＊＊

■　前回の会報の目次と話題

・『三國志』魏書・倭人条の邪馬壹国までの道行きについて（Ⅲ）瀬戸市　林　研心

・『魏志』倭人伝との付き合い方(2)　小牧市　宮澤　健二

・『漢書』西域伝と至＊＊記法　吉川市　堀口　啓一

・『先代旧事本紀』や『和名類聚抄』に見える蘇我氏の深淵　名古屋市　石田泉城

■　例会の予定

１　日時　令和７年**11月16日（日）１３時半**

２　場所　名古屋市市政資料館　第４会議室

３　次々回以降の予定

12/13、1/17、2/14、3/14、4/18

■　投稿締切り日　11月27日(木)

送付先　toukaikodai@yahoo.co.jp　石田